

DM閲覧・加工・データ変換プログラム

DM - Xmapフリー版操作説明

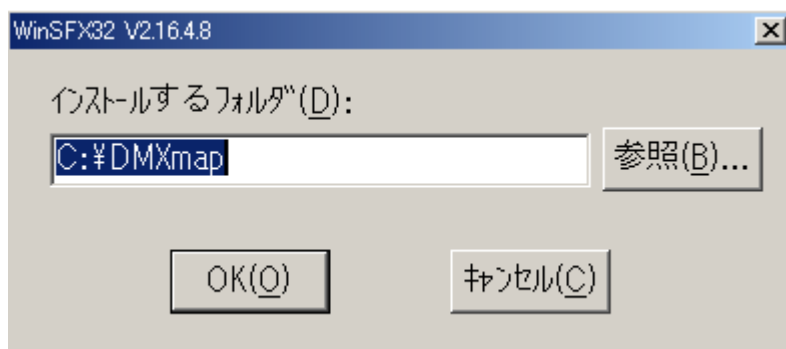
DM閲覧・加工・データ変換プログラムDM - Xmapのインストール手順および地図データのコンバート方法、閲覧やデータ加工の操作方法について説明します。

[DM - Xmapのインストール]

(1) DM - Xmapのインストール手順

セットアッププログラム DMXsetup.EXE は自己解凍型の圧縮ファイルです。ダブルクリック（または右ボタンから「開く」）して下さい。

以下のようなダイアログが現れます。



フォルダーの指定は通常このままでよいと思われませんが、特に所定のフォルダーにインストールを行う場合は、そのフォルダー名に書き直して下さい。ドライブが異なる場合ドライブも指定して下さい。

[OK] ボタンを押下しますと、インストールが始まり、すぐにインストールが終了します。

指定したフォルダーに、DM - Xmapの本体プログラムおよび地形図のコンバータやビューアがインストールされます。

(2) ショートカットの作成手順

インストールされたプログラムを実行する場合はショートカットを作成しておく便利です。

ショートカットは以下のようにして作成します。

インストールしたフォルダー内の DMXmap.exe をマウスでクリックし、右ボタンから「コピー」を選びます。

マウスをデスクトップに移動し、右ボタンから「ショートカットの貼り付け」を選びます。

ショートカットのアイコンがデスクトップに作られます。

(3) DM - Xmapのアンインストール

アンインストールはここで作成したフォルダー（例の場合 C:¥DMXmap）全体を消去するだけです。

[動作環境]

OS: Windows 98, Me, NT, 2000, Xp, Vista, 7

CPU: Pentium 300MHz以上を推奨

メモリ: 64MB以上を推奨

ハードディスク: 24MB + 作成される地図の区域分のディスク容量が必要です

ディスプレイ: 1024 x 768ドット以上、256色以上を推奨

(インストールにCDドライブが必要です)

以下の説明は「DM - Xmap正規版」のもので、フリー版では実行できない機能も含まれておりますこと、ご承知おき下さい。

[DM - Xmapの概要]

DM - Xmapは、全てのDM標準ファイル([正規図郭DM] [非正規図郭DM])に対し、自動図郭割り、展開、閲覧、図面重ね合せ(旧測地系と新測地系の重ね合せ等) 検索ビュー(指定標高のコンター等) ユーザマップの作成等を容易に実行する「DM閲覧・加工・データ変換プログラム」です。

具体的には、任意個数の図郭のDM標準ファイルに対し、自動図郭割り、展開(家屋はポリゴン化します)を行い、閲覧機能、検索機能、DM地形図の編集、ユーザマップ作成機能により、多目的地図を作成した上で、「必要な区域を必要な縮尺に必要なレイヤのみ」DXFファイル等にデータ変換します。

DM - Xmapが対象とするDM標準ファイルは以下のようです。直交格子の図郭で取得された縮尺1:2500等のDM地図を[正規図郭DM]と呼び、都市計画系DMがこれにあたります。格子状でなく任意の向き、大きさの図郭で取得された縮尺1:2500等のDM地図を[非正規図郭DM]と呼び、全国の河川事務所等で作成されている河川系DMがこれにあたります。河川系DMでは、図郭が河川の流れに沿って形状が変化し、図郭のバウンダリ(最大、最小の座標)はオーバーラップします。

DM地形図の縮尺は1:2500のみならず、1:5000や1:10000も全て実行できます。測地系も世界測地系、日本測地系を問わず実行でき、2つの測地系の地図を重ね合わせることもできます。

DM - Xmapは、これらの地形データをDM標準ファイルから、ワープロ感覚で、[新規作成] [保存] [開く] [削除]といった操作で実行し、保存された地図に対しビューを複数同時に開くことができます。

地図データ変換として、EMF(拡張メタファイル)、EPSファイル、DXFファイル変換が実行できます。

このプログラムにより、DMの地形データを2次元/3次元CAD、3次元CGへ利用することができます。

<注意> [正規図郭DM] [非正規図郭DM]共に縮尺は1:2500のみならず、1:5000や1:10000も全て実行できます。1:5000や1:10000についても、ほぼ十分なレイヤ定義を行ってあります。

[DM - Xmapと基盤地図情報]

平成20年4月から、国土地理院のサイトより「基盤地図情報ダウンロードサービス」が開始されました。

基盤地図情報は5m標高メッシュや1:25000地形図等、各種の地形データから成りますが、特筆すべきは白地図つまり都市計画基図と呼称される1:2500 デジタルマッピング地形図をベースに作られた基盤地図情報を含んでいる、ということです。

このデータは下記の13種:

- (1) 測量の基準点 (2) 海岸線 (3) 公共施設の境界線(道路区域界)
- (4) 公共施設の境界線(河川区域界)(5) 行政区画の境界線 (6) 道路縁
- (7) 河川堤防の表法肩の法線 (8) 軌道の中心線 (9) 標高点 (10) 水涯線
- (11) 建築物の外周線 (12) 市町村の町・字の境界線 (13) 街区の境界線

から成るものですが、要約すると、道路縁と建物形状、鉄道(軌道)、水涯線、行政界といった謂わば「デジタルマッピング(DM)地形データ」の核心部分を含んでいます。

DM - Xmapは、このような「基盤地図情報」のDMファイルに対して、表示やデータ変換が実行できます。

[1] 基盤地図情報(1:2500DM地形データ)の取り込みとデータ変換

完全なDM標準ファイルではありませんが、主要な項目を含んだ有用なDMデータです。

正規のDM標準ファイルに準じた処理が可能です。

[2] 基盤地図情報(1:25000DM地形データ)の取り込みとデータ変換

1:25000地形データを1:2500国土基本図の図郭割に従って取り直した地形データです。

日本全国を都道府県単位で網羅していて、海岸線、行政区画、道路縁、軌道の中心線、等高線(標高点と表示されています) 水涯線から成ります。元が1:25000地形データですから、海岸線や等高線のような、広域の地形図に適しています。

このDMデータは完全なDM標準ファイルではありませんが、DM - Xmapではレイヤ単位での表示のオンオフや、レイヤ毎の強調表示、地図としての表示やEMF(拡張メタファイル)の作成、EPSファイル、DXFファイルへの変換等、正規のDM標準ファイルと同様に実行できます。

[DM - Xmap の適用範囲]

対象となる地図データは以下のようです。

[正規図郭DM]: 直交格子の図郭で取得された縮尺 1 : 2 5 0 0 等の都市計画系 DM 地図等

[非正規図郭DM]: 全国の河川事務所で作成されている、格子状でなく任意の向き、大きさの図郭で取得された縮尺 1 : 2 5 0 0 等の河川系 DM 地図等

DM 地形図の縮尺は 1 : 2 5 0 0 のみならず、1 : 5 0 0 0 や 1 : 1 0 0 0 0 も全て実行できます。

測地系も世界測地系、日本測地系を問わず実行でき、2 つの測地系の地図を重ね合わせることもできます。

地図データは 1 枚の図郭でも、6 0 0 枚の図郭でもかまいません。同一座標系でさえあれば、枚数に制限はありません。座標系が同一というのは、例えば関東地方では 9 系、近畿では 6 系といった国土座標の座標系番号です。

地図データをコンバートする際には、C D 等のルートでも構いませんが、ワークフォルダーに集めると便利です。

<注意> [正規図郭DM] [非正規図郭DM] 共に縮尺は 1 : 2 5 0 0 のみならず、1 : 5 0 0 0 や 1 : 1 0 0 0 0 も全て実行できます。1 : 5 0 0 や 1 : 1 0 0 0 についても、ほぼ十分なレイヤ定義を行ってあります。

[DM - Xmap の機能一覧]

DM - Xmap の機能を一覧表示します。

主たる機能

デジタルマッピング (DM) の全レイヤ、全項目をオン / オフ表示できます。

それぞれの項目について表示の色や線種、線号 (線の太さ) を個別に変更できます。線号は実線の時のみ有効です。

任意の縮尺で正確な地図が印刷できます。

しおり機能により簡易のデータベースシステムが構築できます。しおりの検索はグループ毎に一覧リストから選択でき、操作が容易です。

ユーザマップ機能により家屋や面形状、線データ、注記、注記の囲み記号、シンボルが自由に入力でき、多目的地図が容易に作成できます。ユーザマップは簡単な操作でカテゴリ化できます。

地図上にグリッドを表示できます。グリッドは基準位置の横座標、縦座標とグリッド間隔 (横、縦別々に指定できます) で指定します。グリッドが表示されている状態で地図データ変換 (E P S や E M F 等) を行った場合、グリッドも一緒に変換でき、とても便利です。

表示画面を切り出してクリップボードから他のソフトで利用できます。また、拡張メタファイル (E M F) が直接作れ、ワードやエクセルで縮尺指定の高精細の地図が利用できます。

地図データが E P S ファイルや D X F ファイル出力でき、デザインや C A D に活用できます。

E M F や E P S ファイル、D X F ファイルは画面が回転した状態でも、回転後の座標で作成できます。

D X F 変換では家屋は厚さを持ったポリラインや 3 D F A C E エンティティとして変換でき、建築 C A D や景観 C G に好適です。

E M F 自由出力機能では、画面表示とは無関係に、任意の範囲の地図を任意の縮尺で拡張メタファイル (E M F) として作成できます。

機能一覧

項目	機能一覧
地図検索	地点地図表示、測地座標検索、図郭指定
レイヤ	一覧 レイヤー一覧表示 図上検索 線・面レイヤ検索、点シンボルレイヤ検索
表示	表示レイヤ 標準レイヤ、レイヤ指定、レイヤ保存、レイヤ呼出し 表示モード 標準カラー、モノクロ、ユーザ設定表示、表示のユーザ設定
印刷	指定縮尺出力、北マーク、縮尺表示、スケールバー、凡例

DM地形図編集	家屋削除、復活復活、面積・周長計測、建物高さ設定 線・注記・地図記号削除、復活
地図データ変換	変換範囲全画面、マウス矩形指定、座標指定 変換形式クリップボード、拡張メタファイル(EMF)、EPS変換 変換形式DXF変換、DXF家屋3D変換、EMF自由出力
しおり	作成・編集新規作成、表示、編集、削除 検索・表示方式グループ毎検索、表示方式(固定、縮尺連動、非表示)
ユーザマップ	カテゴリーカテゴリー設定、表示カテゴリー選択、入力・編集カテゴリー選択 家屋家屋入力(堅牢、普通)、頂点移動、建物高さ設定、削除、復活 面形状表示設定、面形状入力(矩形、円、多角形)、建物複写 線結合で面構成、表示変更、頂点移動、削除、復活 線表示設定、線入力、DM線複写、表示変更 線修正(頂点移動、線上中間点挿入、頂点分割)、削除、復活 注記表示設定、注記入力、移動、表示変更、削除、復活 注記囲み記号入力、移動、表示変更、削除 シンボル表示設定、入力、移動、表示変更、削除、復活 定色シンボル表示設定、入力、移動、表示変更、削除、復活
地図重ね合せ	重ね合せ地図の指定、重ね合せの色指定、重ね合せオンオフ 重ね合せ変換形式(旧測地系から新測地系へ、無変換)
検索ビュー	ビュー項目指定、ビューの色設定
ツールバー	基本図面操作拡大、縮小、任意拡大、八方向移動、中心移動 計測機能距離計測、面積計測、角度計測、座標表示 他の図面操作地図の回転とリセット、率の変更、全域表示、縮尺母数設定 特殊な操作レイヤ強調、中心座標、真北角度、ズーム、スクロール 特殊な操作図郭線表示、カテゴリー種別、DM線範囲表示、建物高さ表示 特殊な操作印刷凡例表示位置、建物オンオフ表示

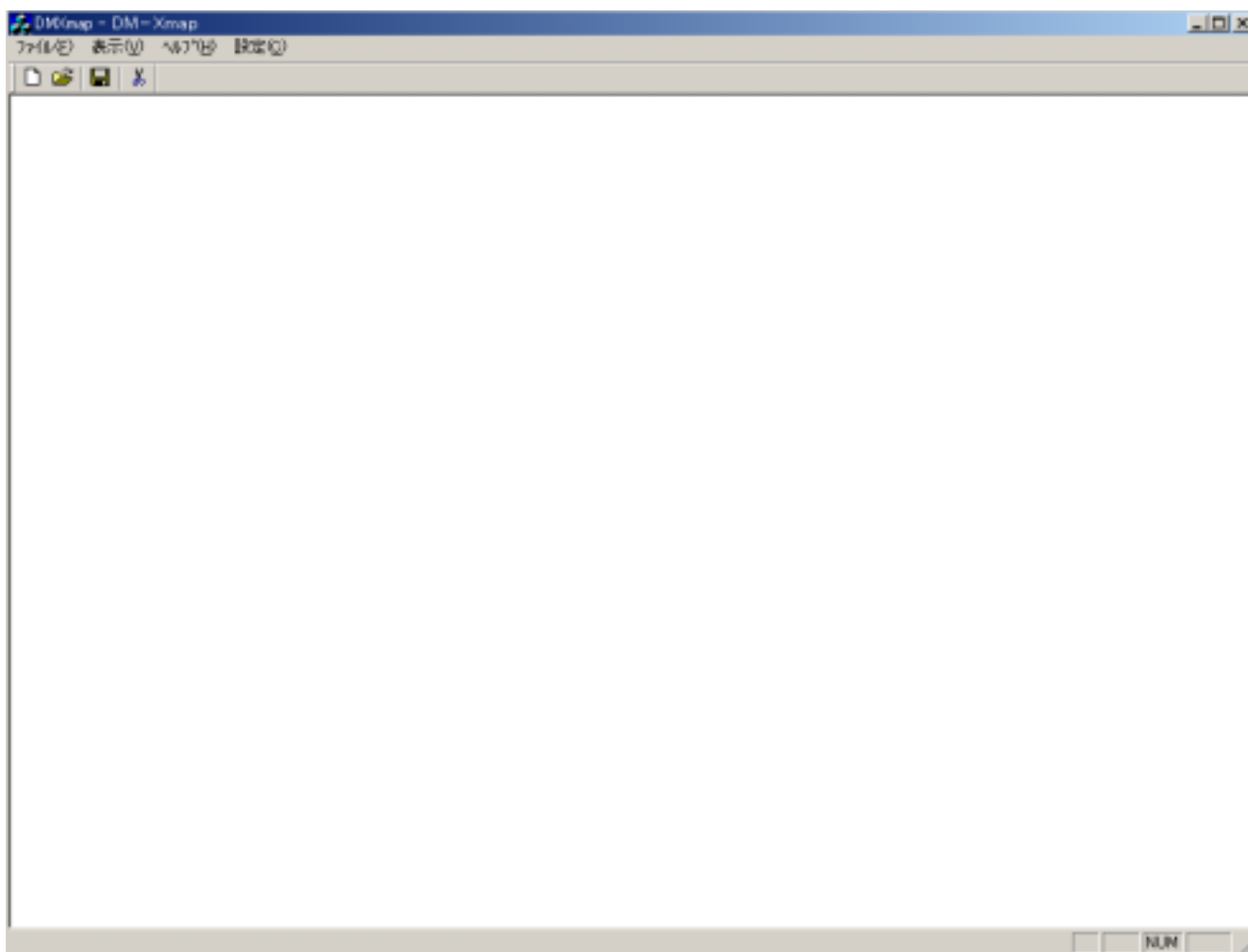
地図データのコンバート)や地形図の閲覧、データ加工、EPS/DXFファイル変換等は全てDM - Xmap 本体プログラムからの実行となります。

[DM - Xmap の操作]

(1) システムの起ち上げ方法

インストールしたフォルダー内のDMXmap.exe をダブルクリック(または右ボタンから「開く」)すると実行プログラム DMXmap が起動します。起動画面を次頁に示します。

上記の手順で、ショートカットを作成してあれば、デスクトップのアイコンをダブルクリック(または右ボタンから「開く」)するだけで実行プログラム DMXmap が起動します。



(2) DM - Xmapの実行にあたって

DM - Xmapの実行にあたって必要な設定は以下の2つです。何れもメニューバーの[設定]で行います。

【座標系および拡張子の設定】

DMデータファイルの拡張子、座標系、及び他に指定するべきパラメータは、デフォルトでは以下のようです。正規/非正規を問わずDM地図データの拡張子は **SHI**、座標系は **09**、DM地図データの漢字コードは **JIS**、等高線の属性数値は**座標値の単位に同じ**、になっています。

変更する必要がある場合は後述の**設定機能**により変更して下さい。

【測地系変換パラメータの地域設定】

DM地図の重ね合せて旧測地系を新測地系に変換する際に必要となる地域毎のパラメータです。

日本全国8つの地域の3次メッシュが定義されます。**地図の重ね合せ機能を使用しない場合には必要ありません。**

デフォルトでは**関東**になっています。実行しようとする地域が関東以外の場合は設定変更して下さい。

(3) システムの機能

[1] 新規作成

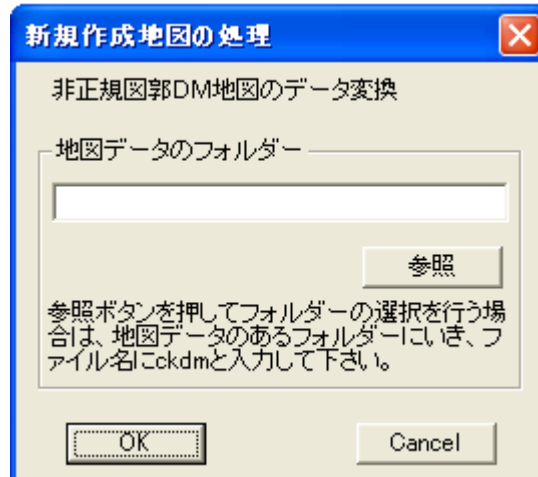
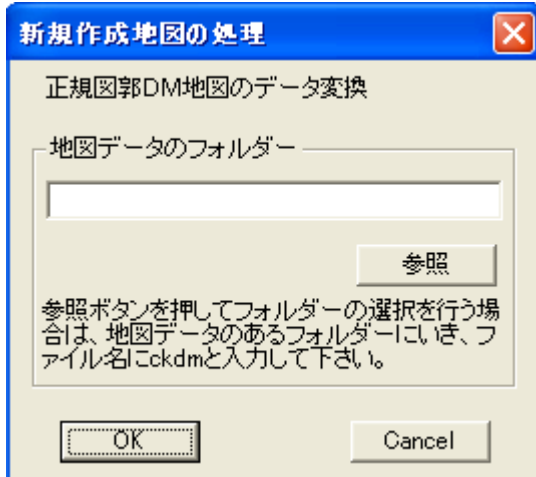
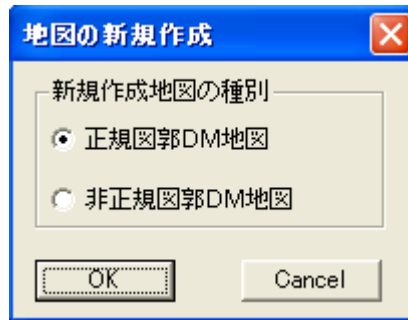
メニューバーの[ファイル] - [新規作成]を選択します。

地図の新規作成画面が現れます。

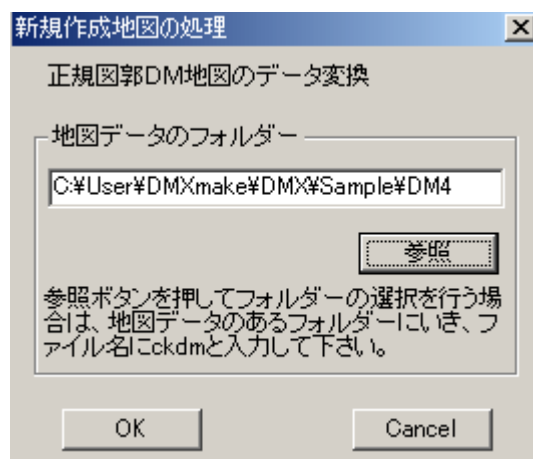
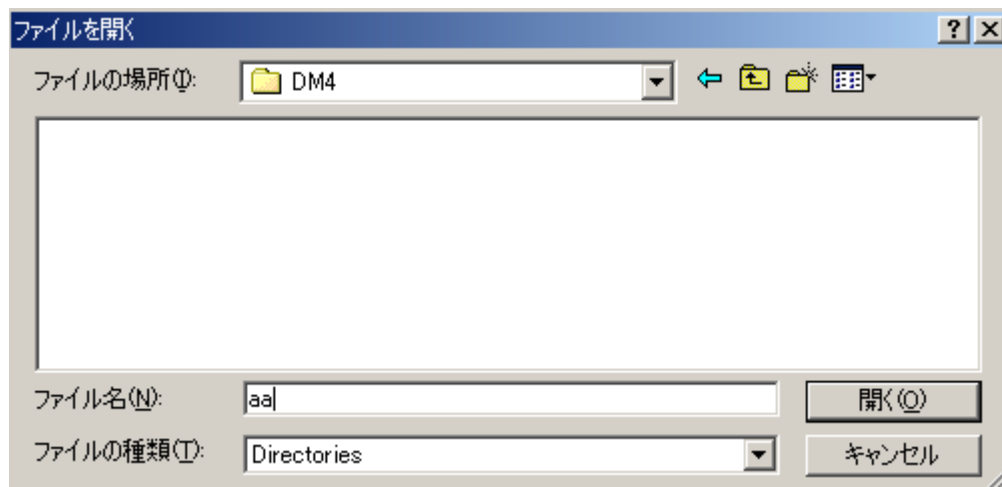
DM - Xmapでは、直交格子の図郭で取得されたDM地図を[正規図郭DM]と呼び、都市計画系DMがこれにあたります。格子状でなく任意の向き、大きさの図郭で取得されたDM地図を[非正規図郭DM]と呼び、河川系DM等がこれにあたります。河川系DMでは、図郭が河川の流れに沿って形状が変化し、図郭のバウンダリ(最大、最小の座標)はオーバーラップします。

データ変換(コンバート)は[正規図郭DM]も[非正規図郭DM]も同じ手順です。

<注意> 地図データのデータ変換(コンバート)に先立って、それぞれの地図データを格納するフォルダーを作成し、変換すべき地図データをその中に格納しておく必要があります。



上記のデータ変換画面で、地図データのフォルダーを指定します。直接フォルダーの場所をキー入力するか、下の画面のように、参照ボタンで地図データのあるフォルダーにいき、仮のファイル名(ckdmでもaaaでもxyzでも、何でも構いません)を入力して[開く]を押下して下さい。すぐ下の画面のように所要のフォルダーが設定されます。



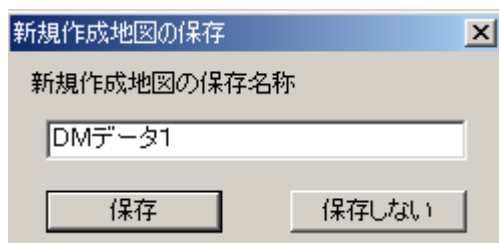
[OK]でデータ変換が始まります。

<注意>地図データがCD-ROMのルートに格納されている場合には、CD-ROMのドライブをGとすると、「G:¥」のようにルートを指定(または選択)します。MOのルートに格納されている場合も同様です。

データ変換が終了すると、[正規図郭DM]であれ[非正規図郭DM]であれ、ビューア(DMビューアと呼称します)が起動します。ビューアの操作概要については後述しますが、詳細はビューアのヘルプ(オンライン文書)をご参照ください。

[保存について]

新規作成で起動したビューアを終了させる際には、以下のような新規作成地図の保存ダイアログが現れます。



データ変換した地図データを保存する場合には、保存名称を全角20文字(40バイト)以内で入力して下さい。

また、閲覧のみが目的でワーク使用の場合は[保存しない]ボタンを押下して下さい。コンバートされた地図データは保存されず、そのまま削除されます。

<注意>データ変換(コンバート)された地図データはDM-Xmapフォルダー内のMapBaseサブフォルダーにMF1、MF2・・・の順にフォルダーが自動作成され格納されます。

新規作成であれ、保存された地図を開いた場合であれ、ビューアの終了時の状態(地図の表示範囲や表示されているレイヤおよび表示色)が保存されますので、次に開いた時には、前回終了した状態から始められます。

<注意>

DM-Xmapではデータ変換(コンバート)された新規作成地図は[正規図郭DM][非正規図郭DM]について何種類でも作成できます。また作成された地図をDM-Xmapに保存しシステムで使用できます。このことによって、複数地域のビューアを別々に同時に開くことができます。

それぞれの地図は1枚の図郭でも、600枚の図郭でも構いません。図郭の枚数に制限はありません。ただ、同一座標系でないと重ね合せの意味はなくなります。

[2]開く

メニューバーの[ファイル]-[開く]を選択します。

保存されている地図の名称一覧が現れます。



開きたい地図を選んで、[OK]を押下すれば、指定した地図が、前回終了した状態(地図の表示範囲や表示されているレイヤおよび表示色)で表示されます。

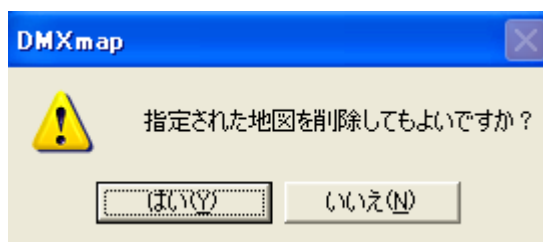
ビューアは複数同時に開くことができます。操作は以下のようです。

開いているビューアをアイコン化します。後方の画面にいつでもDM - Xmap本体プログラムが稼動していますので、メニューの[ファイル] - [開く]を選択し別の地図を開いて下さい。開かれた地図をアイコン化して、次々に複数の地図が開けます。

[3] 削除

メニューの[ファイル] - [削除]を選択します。

保存されている地図の名称一覧が現れますので、削除したい地図を選択して[OK]を押して下さい。



削除確認のダイアログが現れ、[はい]を押すと地図が削除されます。

(4) 設定機能

DM - Xmapには座標系・拡張子（他にDM地図データの漢字コードと等高線の属性数値の指定）を設定する機能と、しおりの項目（グループの定義）を設定する機能および測地系変換パラメータの地域設定の機能があります。座標系・拡張子の設定は地図データを変換（コンバート）する際に不可欠なものです。また、DM地図の重ね合せて、旧測地系を新測地系に変換する際には、測地系変換パラメータの設定も不可欠となります。

[1] 座標系・拡張子の設定

メニューの[設定] - [座標系・拡張子の設定]を選択します。

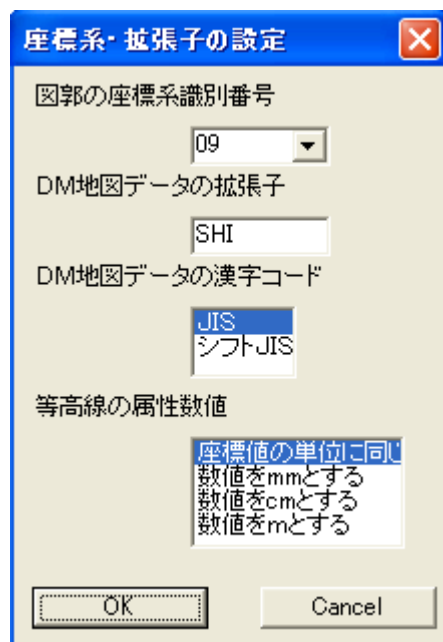
次頁の画面が現れます。

座標系識別番号は地図データの識別に用いられるばかりでなく、旧測地系から新測地系への変換に重要な働きがあります。下の画面で01から19の何れかを選択して下さい。その下の拡張子は[正規図郭DM] [非正規図郭DM]のデータを集めてくる際の基となります。DMデータの場合、かつてはSHIという拡張子がよく見受けられたのですが、最近はDMという拡張子も増えています。その下の漢字コードは通常JISですが、シフトJISの場合はそちらを選択して下さい。最後の等高線の属性数値は通常デフォルトでよいと思われませんが、m指定というもありますので、注意して下さい。

通常、これらのデータは一度設定すれば変更することは少ないと思われませんが、拡張子が異なる際には、その都度設定して下さい。

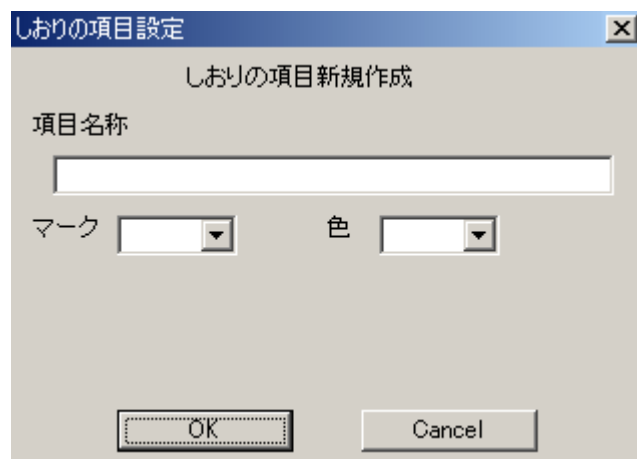
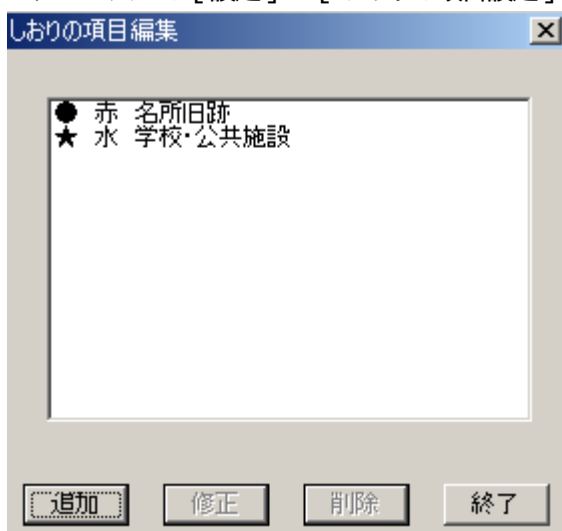
<注意>

国土地理院のサイトからダウンロードできる「基盤地図情報」では、漢字コードはシフトJISです。また、広域図のための「25,000分1基盤地図情報」データでは等高線の属性数値は「数値をmとする」を選ぶ必要があります。



[2] しおりの項目設定

メニューバーの [設定] - [しおりの項目設定] を選択します。

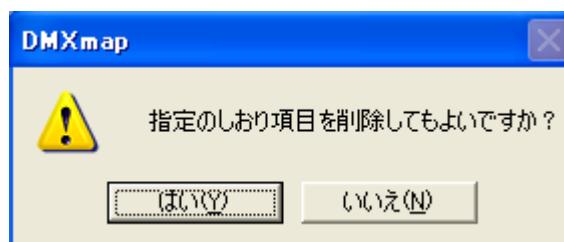


上の左画面が現れます。

[追加] でしおりの項目 (グループの定義) を増やせます。右画面のように項目の記述とシンボル、色の選択を行います。[修正] は設定したしおりの項目を変更します。修正の画面は追加の画面と同じですが、追加の場合は全て欄が空白に対して、修正では現行の内容が表示されて現れます。

[削除] で設定したしおりの項目を削除します。

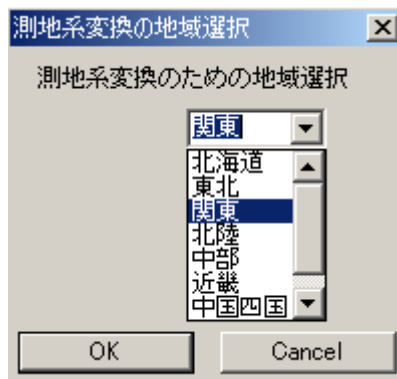
削除の際は次のような削除確認の画面が現れ、[はい] で削除されます。



[3] 測地系変換パラメータの地域設定

メニューバーの [設定] - [測地系変換パラメータの地域設定] を選択します。

以下の画面が現れます。

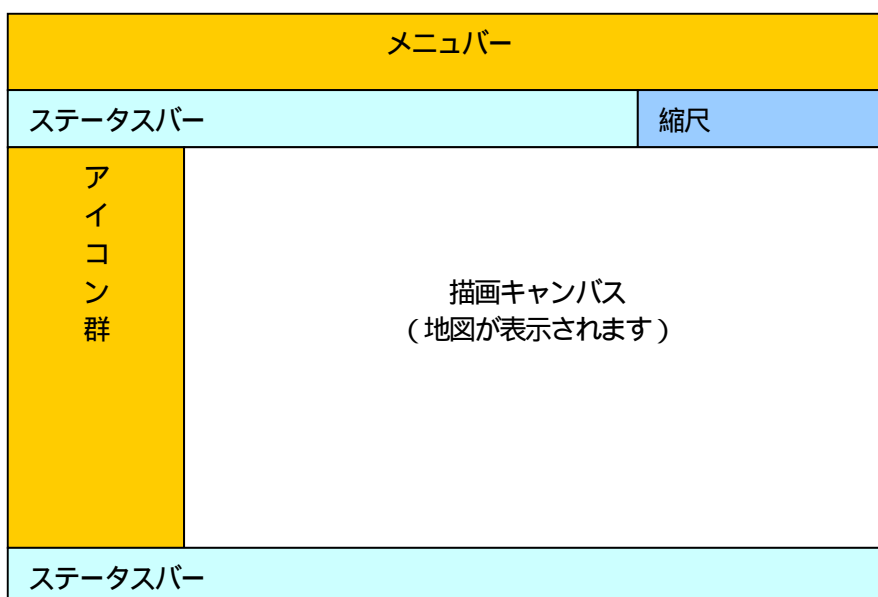


デフォルトでは関東が選ばれています。対象とする地形図が他の地域であれば、ドロップダウンから適切な地域を選択して下さい。

[ビューアの操作について]

DM閲覧・加工・データ変換プログラムDM - Xmapでは[正規図郭DM]であれ[非正規図郭DM]であれ、DMビューアが呼び出されます。

ビューアの画面構成は下図のようです。地図（描画キャンバス）の上下にステータスバーが現れます。上のステータスバーの右端には現在表示されている地図の縮尺が示されます。下のステータスバーにはガイダンスメッセージが示されます。



アイコン群（ツールバー）は次頁のようです。

これらの機能及び操作の詳細や、ビューアの操作につきましては、ビューアのヘルプ（オンライン文書）をご参照ください。



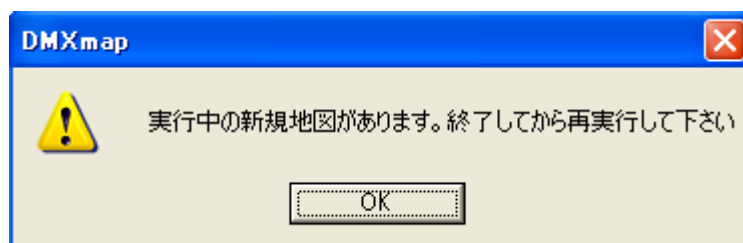
DMビューアのカスタマイズについて

DMビューアをさまざまにカスタマイズすることができます。

これについては、Sampleフォルダーにある「DMビューアカスタマイズ説明」(DMXcustom.PDF)をご参照下さい。

[DM - Xmap実行上のトラブルシューティング]

- [1] 新規作成で開かれたDMビューアを正規に終了させなかった場合、あらためて新規作成を行おうとすると以下のメッセージが表示されます。



この場合は実行フォルダーにある newexec.bin を削除して下さい。

- [2] 新規作成で地図データが不整合等の原因でDM - Xmapの地図データのインストールが異常終了した場合、実行フォルダーの下にある CurMap フォルダの中身を全てクリアー（ファイルを削除）して下さい。

[DM - Xmap のカスタマイズ]

DM - Xmap は [正規図郭DM] [非正規図郭DM] の全てのDM標準ファイルに対応しています。DM標準ファイルは東京都DMをはじめ、北海道から沖縄まで形式は不変です。従って通常は、DM - Xmap 本体プログラムの [設定機能] により、座標系・拡張子の設定と測地系変換パラメータの地域設定を行えば、特にカスタマイズは不要です。

カスタマイズが必要になるのは、レイヤの選定が標準的なDMの区分と異なる場合です。レイヤが標準より少ない場合は、余分なレイヤをそのままにして置けばよいでしょう。レイヤの追加がある場合はカスタマイズが必須となります。

<注意>

DM - Xmap は 500 分 1 から 10000 分 1 の全てのDM標準ファイルに対応しているため、縮尺によってはレイヤが過剰になります。不要なレイヤを削除することもできますが、実行時に「当該地図で実際に使用されているレイヤ」を表示する機能がありますので、余分なレイヤはそのままにしておくことをお勧めします。

カスタマイズの手順を下記に述べます。

変更の対象となるのは Def フォルダにある下表のテキストファイルです。

	レイヤの設定	レイヤの配置	ユーザ表示の配置
正規図郭DM	Hcname.TAB , Defcode.TAB	LaydefDM.TXT , LayitemDM.TXT	UgdefDM.TXT LayHCLim.TXT

レイヤの設定は Hcname.TAB と Defcode.TAB で行われます。前者はただ表現分類コードとレイヤ名称を表にしたもの、後者はレイヤの表示をどのように行うかを記述したものです。Hcname.TAB に追加したい表現分類コードとレイヤ名称を記入します。表現分類コードの昇順に記載されていますので、所定の位置に記入して下さい。対応する位置の Defcode.TAB に表示方法を記載します。Defcode.TAB の設定方法は少し複雑です。最初の数行を記します。

```
1101 0 2 0 1 2 22 0 22 0 1250 325 100
1103 0 2 0 1 2 22 0 22 0 1250 100 100
1104 24000 2 2 1 1 22 0 22 0 1250 200 100
1106 24000 2 1 1 1 22 0 22 0 1250 200 100
1107 24000 2 9 1 1 22 0 22 0 1250 250 0
2101 24000 2 0 1 1 24 0 0 0 0
2103 12000 2 9 1 1 24 0 0 0 375 125 0
```

左から順に表現分類コード、表示縮尺母数、データ型、線種コード、標準表示フラグ、線号、標準カラーコード、モノクロカラーコード、印刷時カラーコード、付加コードフラグ、および可変個のパラメータ群となっています。

このうち、標準カラーコード、モノクロカラーコード、印刷時カラーコードはカラー定義テーブル Color23.TAB に従って設定する必要があります。モノクロつまり黒はカラーコードの 0 (ゼロ) です。表示縮尺母数は 0 であれば常に表示、正值であれば縮尺母数とその値よりも小さくなった時 (つまり拡大された時) から表示します。データ型は 1 が点シンボル、2 が線、3 が面、9 が注記です。3 の面はここでは使われていません。線種コードは 0 が実線、1 が一点鎖線、2 が二点鎖線、9 が点線です。標準表示フラグは 1 なら標準レイヤで表示、0 なら非表示となります。現行のレイヤ項目は標準レイヤで全て表示にしてあります。可変個のパラメータ群については表現分類コード 2101 のようにゼロ設定でよいと思われます。付加コードフラグは少し注意が必要です。これはレイヤが線と地図記号の 2 つから成る場合の定義です。小物体や水部に関する構造物等では、大きい図形は真形つまり線となり、小さい図形は記号で描かれます。これに従い、1 つのレイヤが複数定義されなければなりません。正規の位置に線データを定義し、データの末尾に地図記号のデータを定義します。この時、付加コードフラグは 1 からの通し番号でなければなりません。

<注意>

不要なレイヤを削除する場合、付加コードフラグがあるレイヤは、末尾の定義も同時に削除する必要があります。更に、全体の付加コードフラグが 1 からの通し番号になるように調整しておく必要があります。余分なレイヤはそのままにしておくことをお勧めしたのは、この事に困っています。

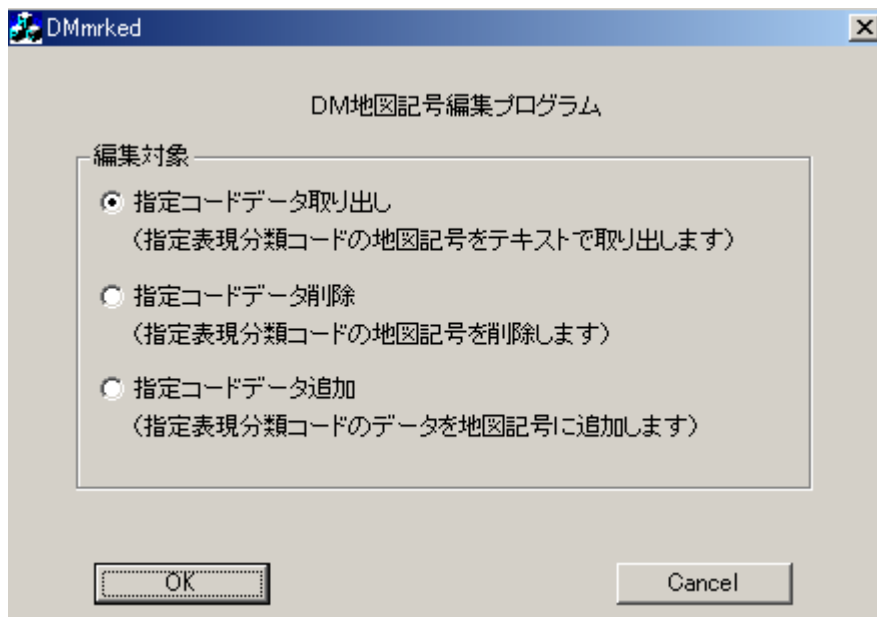
次にレイヤの配置を設定します。LaydefDM.TXT でレイヤのグループ名称とグループ内のレイヤ項目数を記述します。グループの最大数は20です。LayitemDM.TXT に、それぞれのグループのレイヤコードを10個ずつ記入します。ひとつのグループの最大数は32です。追加されたレイヤをこれらのグループ内に記載します。もし、最大数を超える場合には別のグループに記載して下さい。

最後にユーザ表示の配置を指定します。これは、表示のユーザ設定（線種、線号、線色）を行うものです。UgdefDM.TXT は LaydefDM.TXT と同様に、レイヤのグループ名称とグループ内のレイヤ項目数を記述しますが、この場合には Hcname.TAB の順序を区分けしたものです。グループの最大数は20です。ひとつのグループの最大数は32です。32を超える場合には別のグループとして記載して下さい。グループをどのように分割するかは自由です。また、この分割に従ったグループ毎の表現分類コードの最大値を記述するのが LayHClim.TXT です。

DM地図記号の編集

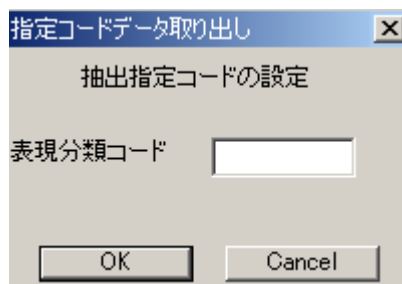
上記のカスタマイズで残っている作業は、DM地図記号の編集です。これは、DM - Xmapが縮尺1:2500の都市計画系DMを標準とし、1:500や1:1000の地図記号のほぼ全てをカバーしているものの、「特別な」地図記号を表示する必要があることによります。過剰の地図記号は無視してよいのですが、不足の地図記号は「指示点」表示になってしまうため、正しく表示するには何らかの手段で補足する必要があります。ここでは、DM地図記号の編集プログラムDMmrkedの操作方法を説明します。

utilフォルダーにあるDMmrkedをダブルクリック（または右ボタン「開く」）すれば、DM地図記号編集プログラムが起動します。

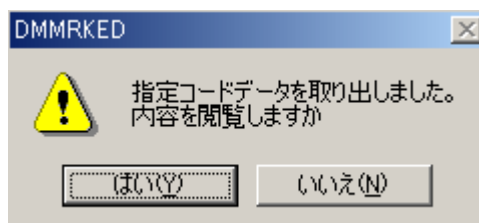


指定コードデータ取り出し

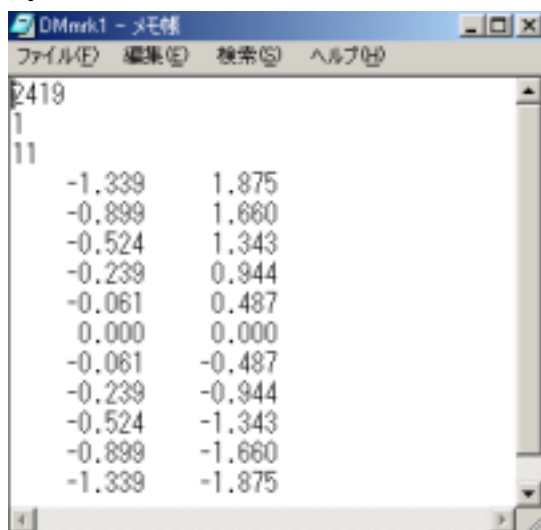
指定表現分類コードのデータをテキスト形式で取り出します。



取り出したいコードを入力します。ここでは、例えば2419を入力してみます。



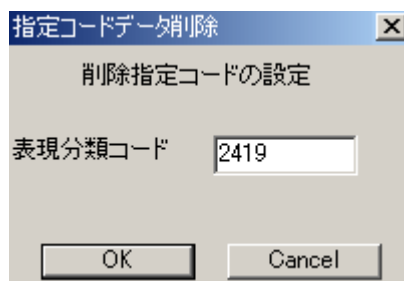
これで、指定表現分類コードのデータがテキスト形式で取り出されました。[はい]を選ぶと下記のようにテキストデータが「メモ帳」で閲覧できます。



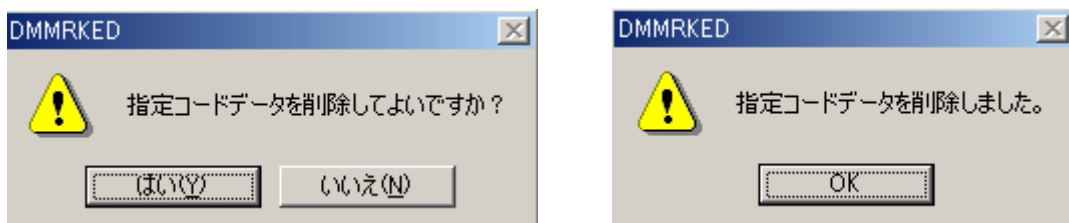
テキストデータはDMmrkedを実行しているutilフォルダーにDMmrk1.txtという名称で作成されます。指定表現分類コードのデータが存在しなければ、エラーメッセージが表示されます。

指定コードデータ削除

指定表現分類コードのデータを削除します。



削除すべきコードを入力します。削除の確認画面があらわれ、[はい]で削除されます。



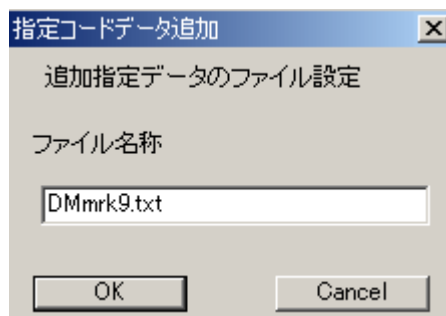
指定コードデータ追加

地図記号のデータを追加します。

この場合には、予め地図記号のストロークデータを作成しておく必要があります。



ここでは、仮に DMmrk9.txt という名称で作成されているとします。



ファイル名称はフォルダーを含むフルパスで指定して下さい。



地図記号のストロークデータフォーマット

地図記号のストロークデータのフォーマットは下記のとおりです。

- (1行目) 表現分類コード(4桁の整数)
- (2行目) ブロック数(一筆描きを1ブロックとした数)
- (3行目) 第1ブロックの点の数

```
x1    y1
x2    y2
...
```

第2ブロックの点の数

```
x1    y1
x2    y2
...
```

第nブロックの点の数

```
x1    y1
x2    y2
...
```

<注意> ブロック定義の点の座標はxが1から10カラムの中、yが11から20カラムの中で、xとyの間には1つ以上の空白が必要です。

また、xとyの値は地図記号の中心を原点として、基本図面(1:2500では横2km、縦1.5km、1:500では横400m、縦300m)上のmm単位の数値です。

DM地図記号の編集や、実際のカスタマイズにつきましては、さまざまな問題点があると思われるので、弊社宛お問い合わせ戴けますよう、お願い申し上げます。

お問い合わせ先

ミューエス株式会社

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿2丁目14番19号

Tel:03-3446-8456 Fax:03-3446-8073

E-mail:ami@mues.co.jp

URL=<http://www.mues.co.jp>